

顔画像を用いた自己の主観年齢の推定

— 絶対年齢推定課題との比較 —

Estimation of Subjective Age Based on Facial Images of Others: Comparison to Absolute Age Estimation Experiments

小西正人¹⁾、東泰宏¹⁾、藤澤隆史²⁾、長田典子¹⁾、小坂明生³⁾、Young-suk Shin⁴⁾

Masato KONISHI¹⁾, Yasuhiro AZUMA¹⁾, Takashi X. FUJISAWA²⁾,
Noriko NAGATA¹⁾, Akio KOSAKA³⁾ & Young-suk SHIN⁴⁾

E-mail : konishi-m@kwansei.ac.jp

和文要旨

自己がイメージする自分の年齢を主観年齢と定義し研究を行っている。日本人、米国人、韓国人における顔画像を用いた自己の主観年齢は、総じて実年齢より若く知覚される傾向がある。しかし、従来の推定方法で算出される主観年齢は他者との相対で決まるため、自己を若く知覚する傾向（＝自己若年視）と他者の年齢を実年齢より高めに推定する傾向（＝他者老年視）の両方の要因が混在する。そこで本研究では、他者老年視のみの影響について考察するため、これまで行ってきた相対的な年齢推定課題ではなく、顔画像に対し「何歳に見えるか」を判断する絶対年齢推定課題を実施する。日本人・米国人・韓国人に実験を実施し、比較検討を行った。その結果、日本人および韓国人では、主観年齢と同様の自己若年視が絶対年齢推定課題においても起こることが確認された。また、日本人、米国人、韓国人共に、加齢に伴い自己若年視が弱くなるという、主観年齢推定課題において最も特徴のあった傾向が、絶対推定年齢課題でも同様に観測された。さらに2つの推定課題の結果の比較では、米国人に有意な差がみられ、自己若年視傾向の要因として考えられている2つの要因：(1) 顔の蓄積記憶による牽引の要因、(2) 社会心理的要因、を切り分ける手がかりを得た。日本人と韓国人の結果の比較に関しては有意な差がみられず、日本人および韓国人の年齢推定においては、社会心理的な要因が強く働く可能性が示唆された。

キーワード：顔画像、主観年齢、実年齢、非線形回帰分析

Keywords : Facial images, Subjective age, Real age, Non-linear Regression Analysis

1. はじめに

コミュニケーションにおいて、人は相手の顔や声などの情報をもとに相手の性別や年齢など様々な属性を推定する。中でも年齢は、相手との関係性を決定するための非常に重要な情報の1つであり、我々は年齢の情報を基に相手との関係性にふさわしい態度や言葉で接しようとする。ところが、我々はしばしば、相手の年齢を実年齢より高く推定し、後になって「もっと年上だと思ったのに……」と意外に感じることもある。

筆者らはこの「他人の顔は年上に見える」傾向が、相手の年齢推定を誤ったのではなく、自己の年齢を実年齢よりも若く知覚しているため引き起こされた現象であると仮定し、日本人、米国人、韓国人を対象に研究を行ってきた [1]-[5]。具体的には、まず評定者に実際の対面的なコミュニケーション状況と同様に、呈示された他者の顔画像が自分より年上か年下かの相対的な年齢推定課題を行ってもらい、得られた評定値の分布データから、「同い年と感じる顔画像の年齢」を「主観年齢」

1) 関西学院大学大学院理工学研究科、Graduate school of Science and Technology, Kwansei Gakuin University

2) 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、Graduate school of Biomedical Sciences, Nagasaki University

3) パデュー大学電気コンピュータ学科、School of Electrical and Computer Engineering, Purdue University

4) 朝鮮大学校情報通信工学科、Department of Information and Communication engineering, Chosun University